

都市部の集合住宅における書籍を媒介とした多世代交流の可能性
～新規分譲マンションにおける絵本読み聞かせ教室・ブックカフェの導入事例から～

東京都健康長寿医療センター研究所 高橋知也
横浜国立大学大学院環境情報研究院 安藤孝敏

老年学リサーチペーパー「社会老年学」2017年 第3号

発行：横浜国立大学 安藤研究室「社会老年学」編集部
(2017年5月31日)

都市部の集合住宅における書籍を媒介とした多世代交流の可能性

～新規分譲マンションにおける絵本読み聞かせ教室・ブックカフェの導入事例から～

東京都健康長寿医療センター研究所 高橋知也
横浜国立大学大学院環境情報研究院 安藤孝敏

1. はじめに

横浜国立大学においては研究成果の社会還元を目指すべく産学官連携を推進しており、安藤研究室においても住宅ディベロッパーである大成有楽不動産株式会社より共同研究の委託を受け、産学連携による都市部の新規分譲マンションにおける多世代交流プログラム導入の機会を得た。そこで、絵本読み聞かせを用いた多世代交流研究「りぷりんと」を参考に、書籍（絵本・文芸書）を用いた「集合住宅における多世代交流プログラム」を構成し、NPO法人りぷりんと・ネットワークおよび株式会社フォーシーカンパニーとも連携しながら、平成27・28年の2年間にわたる活動を行った。本稿では多世代交流の意義や集合住宅における「居場所」作りの意義、「りぷりんと」研究についての概要や一連の研究報告等についても触れながら、活動を通じて得られた結果と考察および課題について報告する。

2. 多世代交流プログラムを導入する意義

年長者がこれまでの人生を通じて培ってきた様々な知識や経験、技術を次の世代に継承していくことが重要であることは、今日までの歴史に鑑みても自明であろう。発達心理学者である E. Erikson は、成人期における「次世代を確立させて導くことへの関心」（1950, 仁科訳 1977）をジェネラティビティ（generativity）という語を用いて説明しており、その十分な発揚と達成が高齢期の心理社会的適応において重要である（Erikson, 1987, 1998）とした。以上を踏まえれば、高齢者が住みなれた地域で積極的な社会参加と世代間交流を継続し、周囲との良好な関係を保ちながら生活を送ることは、こころの健康や生活の質（QOL）の高まりに資するものと期待される。

また若年世代にとっても、世代間交流は高齢者理解を促進する上で有用であると考えられる。子どもと高齢者との交流は、現代社会における核家族化や地域における交流の希薄化によってその機会が減少しているとの報告がなされており（清水ら, 2000; 中谷ら, 2002）、機会が減少したことで子どもが高齢者の身体的特徴や心理的特徴を把握し理解できる機会が大幅に減少している（森・郷木, 2014）との指摘もある。

このように高齢者の実像を捉えづらい環境の中では、子どもの持つ「高齢者に関する知識」はテレビやインターネットなどのメディア媒体からによるものに偏りがちになるものと推察される。荻原ら（2009）によれば、マスメディアによる高齢者の描かれ方は「虚

弱」、「不平を言う」、「威圧的」といった否定的なものを含むとされており、高齢者との直接的な交流に乏しい子どもが高齢者のイメージを形成するにあたり、偏った情報に基づいた負のステレオタイプが形成される懸念がある。さらに高齢者と現役世代の間では世代間での格差拡大による世代間対立が懸念されており、相互理解の促進やソーシャル・キャピタルの醸成を目指す上で、やはり世代間交流が重要であると考えられる。

3. 集合住宅における「居場所」づくりの重要性

近年集合住宅においては、個別性や匿名性といった住民のプライバシーを重視する傾向の強まりを反映して電子錠や各階切り離し運転エレベーターの導入といったセキュリティの高さに商品としての価値が認められているが、それらによってもたらされる匿名性の高さが、かえって居住者の社会的孤立を助長する可能性が考えられる。また地域コミュニティそのものの縮退が進む現代においては、例えば2005年に制作された映画『Always 三丁目の夕日』の世界に表現されるような「高度経済成長期の日本に存在した自然発生的な世代間交流」の復活はもはや期待できず、新たに世代間交流を創出するための「熟慮された仕掛け」（杉岡・倉岡，2009）が必要であることは言を俟たない。

特に一人暮らし高齢者や育児家庭といった「周囲からの孤立や閉じこもりのリスク」を抱えやすいとされる居住者にとって、集合住宅の共有部（エントランスやラウンジ、キッズルーム等）を用いた住民同士の交流の場には孤立や閉じこもりを防ぐための「居場所」として機能することを期待できる。とはいえ、社会参加に消極的な人々を交流の場へと導くためには、参加することに対する障壁の低さに加え、導入するプログラムそのものに「参加してみたい」と思わせる魅力がなければならないことは自明であろう。誰もが参加してみたいと思うプログラムが導入されれば、その場には自然と居住者が集まり、プログラムへの参加を通して多世代交流の機会も創出されるはずである。すなわち、集合住宅における多世代交流プログラムの成功はそのまま「居場所」づくりの成功であるともいえるだろう。

4. 集合住宅におけるコミュニティに対する住民、ディベロッパーの価値観の変容

従来の団地においては、複数の棟の居住者が一つのコミュニティを作るというのが一般的（片桐，2007）であった。しかし近年の集合住宅においては、コミュニティを通じた繋がりは弱いものになりつつある。分譲マンションにおいては「建物の区分所有等に関する法律」により管理組合の設置が義務付けられているものの、施設・設備の維持保全目的の側面が強く、防犯や防災、非常時相互支援等の機能が働くことは少ないとの指摘（村田ら，2012）もある。

集合住宅におけるコミュニティの希薄化には、居室を分譲・販売するディベロッパー側の事情もある。一例として、投資から回収までのスパンが短くなるに伴い、効率性やコストを重視せざるを得ないため、集合住宅を中心にじっくりと一つの地域を作っていくよう

な余裕がなくなっているとの見方や、高い個別性や匿名性を備えた「売りやすい住宅」が定式化され、そのスタイルからの離脱が困難になっている（つなぐネットコミュニケーションズ, 2012）といった意見がみられる。

このような「集合住宅におけるコミュニティの希薄化」を危惧する声が聞かれる一方で、目に見える形を持ったコミュニティの縮退は「SNSをはじめとするテクノロジーの進歩により居住者同士の繋がり方は多様になった結果である」との見方もできるかもしれない。マンションを含めた街の様相もめまぐるしく変化している現代においては、集合住宅におけるコミュニティの在り方についても、日々新しいものを模索していく必要があるといえよう。

5. 多世代交流プログラムの構成 — 「りぷりんと」を参考にして—

多世代交流プログラムの構成にあたっては、「世代間交流による高齢者の社会貢献に関する研究 (Research of Productivity by Intergenerational Sympathy)」、通称「りぷりんと」を参考にした。「りぷりんと」は2004年6月より東京都健康長寿医療センター研究所で開始された研究であり、筆者の一人も2012年より本研究に関与している。

「りぷりんと」は「高齢者による絵本の読み聞かせボランティア活動」を主たるプログラムとしており、絵本の読み聞かせを通じた多世代交流による世代間の相互理解を促進することはもちろん、高齢者の心身機能維持・向上、児童の図書や文学に対する興味関心の発揚、地域における繋がり（ソーシャル・キャピタルとも）の醸成などを狙いとしている。

Yasunaga et al. (2016) によれば、我が国には世代間交流プログラムが多数存在しており、これまでの研究から世代間交流プログラムの導入によるポジティブな効果が示唆されているものの、その多くは短期的、一時的な効果に留まるものであった。一方で、絵本読み聞かせを通じた「りぷりんと」の多世代交流プログラムに参加する高齢者に対する追跡調査の結果、日常生活における子どもとのやりとりや主観的健康感において長期的な効果がみられた。さらに藤原ら (2007, 2010) は、「りぷりんと」の多世代交流プログラムに参加した児童において高齢者に対する肯定的なイメージが維持される可能性を示したほか、参加した児童を媒介として、その保護者の高齢者に対する信頼感の構築にも寄与する可能性を示唆するなど、「りぷりんと」に関する一連の研究から、絵本読み聞かせ活動は高齢者と子どもの二者間のみならず、保護者も含めた三者間の繋がりにも寄与する可能性のあるプログラムであることが示唆されているものと考えられる。

そこで筆者らは、「りぷりんと」に参加する読み聞かせシニアボランティアが地域で読み聞かせを行う中で培ったプログラムの運営手法を参考に、新規分譲された集合住宅の共有部を会場とする「絵本読み聞かせ教室」(平成27、28年)と「ブックカフェ」(平成28年)を開催した。

6. 「集合住宅における多世代交流に関する研究」の概要

今回導入した多世代交流プログラムである「絵本読み聞かせ教室」および「ブックカフェ」は、2014年から2015年にかけて新規に分譲販売が行われた集合住宅にて展開されている『マチ TOMO プロジェクト』におけるプログラムの一つとして位置付けられているものである。同プロジェクトは、当該マンションのディベロッパーである大成有楽不動産株式会社が産学官の多様な団体と連携して導入しているコミュニティ支援プログラムであり(図1と図2)、プログラム発足当初より当研究室とも連携が開始されている。新規分譲マンションという新しいコミュニティ内において入居者同士が交流を深めることは、コミュニティの活性化のみならず団地内における子育てや防犯意識を高めることにも繋がると考えられる。

集合住宅に居住する住民と産学官といった外部組織との連携は、当該事業以外にも千里ニュータウン(大阪大学)や後楽町団地(北九州市立大学)などでも展開されているが、様々な団体や企業、大学が連携して一つのプロジェクトを支えているという点に、マチ TOMO プロジェクトの特色があるといえよう。分譲マンションにおける交流の実態やコミュニティの形成過程は沢田ら(2008)や村田ら(2010)により報告されているが、多世代交流を伴った分譲マンション住民によるコミュニティ形成に関する報告や新規分譲マンションにおけるコミュニティ形成の取り組みについての報告は現在までに乏しく、本プログラムは新奇性の高いものであるといえよう。

プログラムの編成にあたっては、講師として絵本読み聞かせ専門のインストラクターを招聘するとともに、「りぷりんと」に参加するシニアの読み聞かせボランティアのうち、近隣地域に活動拠点を持つ団体へ協力を依頼した。また居住者同士による多世代交流が生じるよう、子どもはもちろん大人にも絵本の面白さや味わい深さを再発見する機会を提供することを意識した選書を行うとともに、マンション内でのグループ作りも視野に入れたプログラム構成とした。なお活動の会場確保や全戸へのチラシ配布は、同じくマチ TOMO プロジェクトに参画する株式会社フォーシーカンパニーの協力により行われた。

プログラムの実施期間は、第1期が2015年4月から12月、第2期は2016年4月から翌年1月であった(表1と表2)。



図1 マチ TOMO プロジェクトの概要 (大成有楽不動産, 2013)



図2 マチ TOMO プロジェクトの協力団体 (大成有楽不動産, 2013)

表1 第1期のプログラム開催日時と内容、参加者数

活動回数	開催日時	内容	参加者数
1	2015/04/25(土) 10:00~11:50	お子様と楽しむ絵本	13
2	2015/05/16(土) 11:00~11:50	大人が楽しむ絵本	8
3	2015/06/20(土) 15:00~16:30	仕掛け絵本に触れる	2
4	2015/07/04(土) 15:00~16:30	季節の絵本1(七夕)	10
5	2015/08/01(土) 14:00~15:30	季節の絵本2(夏)	4
6	2015/08/22(土) 14:00~15:30	季節の絵本3(おぼけ)	7
7	2015/09/19(土) 14:00~15:30	季節の絵本4(月)	3
8	2015/10/04(土) 14:00~15:30	大人の絵本1(柳田邦男)	4
9	2015/10/24(土) 14:00~15:30	大人の絵本2(村上春樹)	4
10	2015/11/21(土) 14:00~15:30	大人も子供も楽しめる絵本	11
11	2015/12/05(土) 14:00~15:30	クリスマスの絵本	5
12	2015/12/26(土) 15:30~16:30	お正月の絵本	1

第1期(延べ):活動回数12回 参加者数72名

表2 第2期のプログラム開催日時と内容、参加者数

活動回数	開催日時	内容	参加者数
1	2016/04/23(土) 14:00~15:50	ブックカフェ 子育てと絵本の関わり	7
2	2016/05/28(土) 10:00~11:50	ブックカフェ お母さんと絵本を	22
3	2016/06/19(日) 10:00~11:50	ブックカフェ お父さんと絵本を	15
4	2016/07/31(日) 10:00~11:50	ブックカフェ 子どもの身体と絵本	19
5	2016/08/27(土) 10:00~11:50	ブックカフェ 運動と絵本	10
6	2016/09/24(土) 10:00~11:50	ブックカフェ 食育と絵本	15
7	2016/11/26(土) 10:00~11:50	ブックカフェ こころの発達と絵本	15
8	2017/01/28(土) 10:00~11:50	ブックカフェ 絵本による本育	10

第2期(延べ):活動回数8回 参加者数113名

7. プログラム実施結果と考察

(1) 第1期

1回当たり80分、全12回の活動を通じ、延べ72名（大人38名、子ども34名）の居住者がプログラムに参加した。参加者層としては子どもや子育て世代が多く、親子が揃って絵本に触れる様子もみられた。男性の参加者も多く、昨今の絵本ブームの影響も感じられた。

活動においては、全12回とも開催月や季節によって異なるテーマを設定し、リピーターの参加者も楽しめるよう配慮した。例えば8月下旬のおはなし会では「おばけ」が登場する絵本を中心にプログラムを構成したが、参加された子どもが両親に寄り添ってお話を聞く様子などがみられた。また11月のおはなし会では、大人も子どもも楽しめるロングセラーや、味わい深いシュールさに富んだ絵本を紹介し、親子が一緒になって絵本の楽しさに触れられるようなきっかけを提供した。

事業開始当初は終始インストラクターが活動を主導し、参加者はインストラクターの言葉に耳を傾けるのみであったが、中盤以降は参加者自らがインストラクターに対してリクエストを出したり、インストラクターに促される形で参加者自らが絵本を読み聞かせたりといった場面もみられるようになった。また活動を継続する中で、リピーターが少しずつ増え始めたほか、子どもが単独で教室に参加するといった様子もみられるようになった。

参加者からは「0歳の子どもに読み聞かせるおすすめ本」や「子育てのコツ」などについての質問が挙がることもあり、その際はインストラクターのほか、運営サポーターとして同席したシニアの方々が自らの経験を踏まえたアドバイスを提供するといった様子もみられた。多世代交流という観点からも望ましい形で事業が展開されたものと考えられる。

(2) 第2期

第1期の結果を踏まえ、プログラムを一部変更、追加して二部構成とするとともに、活動時間の配分も変更した。変更に伴い、1回あたりの活動時間を80分から110分に変更した。

まず新たなプログラムとして、絵本以外の文芸作品（文芸・評論・随筆等）自由に持ち寄る、あるいは特定の作家または作品をピックアップして議論するといった活動の場として「ブックカフェ」を新たに導入した。これは、絵本以外のコンテンツを希望する居住者のニーズを満たすことを期待したものである。一方絵本を用いたプログラムとしては、第1期の「絵本読み聞かせ教室」をリニューアルし、より子育て世代向けに特化した「絵本で子育て教室」に再編した。

その結果、全8回の活動を通じ、延べ113名（大人68名、お子さま：45名）の居住者が参加した。参加者層としてはブックカフェにおいてはミドルシニア、絵本で子育て教室では親子連れが多く、父子での参加や両親と子ども揃っての参加も多くみられた。最終的な参加者数は第1期（72名）と比較して約1.6倍の参加者数となった。参加者増加の背景には、活動に対する認知の広がりや開催時間の変更（第1期では午後、第2期では午前）による参加者層の拡大などが考えられる。

次に活動概要についてであるが、まずブックカフェでは参加者の希望や没後100年を迎

えてメディアでも多く取り上げられたことを背景として、夏目漱石にスポットを当てた回を複数設けた。その他、お気に入りの1冊を持ち寄る企画や、最近読んだ本に関するブックトークなど、多様なテーマを用意することで、リピーターも楽しめるプログラム構成とした。

また絵本で子育て教室では、第1期と同様、開催月によって異なるテーマを設定し、初めて参加する人はもちろん、リピーターの参加者も楽しみながら絵本の世界を深く味わえるようにプログラムを見直した。例えば5月は「母の日」、6月は「父の日」にちなんだ絵本を用意したほか、9月は「食欲の秋」に合わせた食育の絵本に加え、横浜国立大学の園田氏による食育に関するコラムを配布するなど、参加者の知的好奇心をくすぐるコンテンツを用意した。

また第1期の反省を踏まえ、事業開始当初から居住者参加型のコンテンツであることを前面に打ち出し、ブックカフェ、絵本で子育て教室とも居住者の積極的なプログラム参加を促した結果、いずれのプログラムにおいても居住者が積極的に活動に関わる形態が浸透し、大きなトラブルもなく、終始楽しく穏やかな雰囲気の中でプログラムが進行した。回が進むにつれ、参加者の子どもや父母が自ら積極的に絵本を選んで読み聞かせを行い、他の参加者や運営者がそれに耳を傾けるといった、第1期ではほとんどみられなかった展開も頻繁にみられるようになった。

第1期同様、参加者からは「子どもへのおすすめ絵本」や「子育てのあり方」などについての質問が挙がることもあり、その際はインストラクターのほか、運営サポーターとして同席したシニアスタッフが自らの経験を踏まえたアドバイスを提供するなど、多世代交流という観点からも望ましい形で事業が展開された。プログラムを通じた相互のやり取りを繰り返す中で、居住者と運営者、居住者同士、そしてプログラムそのものに対する信頼や理解が一層深化したものと考えられる。

8. 運営上の課題と改善案

(1) 参加人数

実質的にマンション居住者のみが対象となっていたため、他の地域におけるイベントや居住者向けイベントとの同日開催となった場合などに、参加者が少なくなる傾向がみられた。この点についてはやむを得ない部分もあるが、より一層魅力的なコンテンツを目指すとともに、居住者への十分な周知方法を考えていく必要がある。

(2) 居住者のニーズとの相違

当初の計画では、居住者同士での多世代交流の実現と絵本の読み聞かせに特化した自主グループの設立までを見据えていたが、参加者との会話を通じてプログラムと居住者のニーズとの間に違いがあることをみとめたため、開催時間やプログラム内容について、その一部見直しを行った。その結果、「絵本で子育て教室」においては第1期に比べ参加者が大きく増加した。プログラムの見直しにより居住者のニーズとのギャップが縮小したことが参加者の増加に繋がったものと推察される。

一方で、第2期より新たに導入したブックカフェへの参加人数は終始伸び悩んだ。「ブックカフェ」という文化そのものが比較的新しいものであり、プログラムの内容やその面白さが居住者に十分に伝わらなかった可能性が考えられる。周知方法の工夫のほかプログラム内容そのものにも改善を加え、より一層魅力的なコンテンツを目指す必要がある。

また、当初プログラムの対象として想定したマンションに居住する高齢者の参加は、居住する高齢者そのものが少ないこともありほとんどみられなかった。結果として多世代交流はサポーターとして参加した高齢者と若年層の居住者の間でなされることとなったが、本来であれば居住者同士の多世代交流が望ましいことは自明であり、多世代に対して興味を喚起させるプログラムの構成、刷新が必要であると考えられる。

(3) マンションの管理組合との連携の不足

マンションを管理する組合との連携が不足しており、当該事業の趣旨を十分伝えることが出来なかったため、会場利用や掲示物の設置などについて十分な理解を得る機会を持つことがかなわなかった。集合住宅内でのプログラムやイベントは、必然的にエントランスやラウンジといった共有部で開催される形になるため、共有部を管理する管理組合との連携は、企画の成否に大きく関わる。連携の不足は第1期、第2期に共通する課題であり、連携の在り方について、引き続き有効な方略を考えていく必要があるといえよう。

[注]

- 1) 横浜国立大学安藤研究室と大成有楽不動産株式会社、株式会社フォーシーカンパニーにより実施された共同研究「集合住宅における多世代交流に関する研究」(研究期間：平成25年10月1日～平成29年3月31日)。本稿の内容はこの共同研究実績報告書に基づいて記述されている。

文献

- Erikson E. H. (1950) *Childhood and society*. New York : W.W. Norton (仁科弥生 (訳) 1977)
- Erikson E. H., Erikson J. M. (1998) *The Life Cycle Completed*. New York : W.W. Norton
- Erikson E. H., Erikson J. M., Kivnick H. Q. (1987) *Vital Involvement in Old Age*. New York : W.W. Norton
- 藤原佳典・渡辺直紀・西 真理子・李 相侖・大場宏美・吉田裕人・佐久間尚子・深谷太郎・小宇佐陽子・井上かず子・天野秀紀・内田 勇人・角野 文彦・新開 省二 (2007) 児童の高齢者イメージに影響をおよぼす要因：“REPRINTS”高齢者ボランティアとの交流頻度の多寡による推移分析から 日本公衆衛生雑誌 54(9) : 615-625
- 藤原佳典・渡辺直紀・西 真理子・大場宏美・李 相侖・小宇佐陽子・矢島さとる・吉田裕人・深谷太郎・佐久間尚子・内田 勇人・新開 省二 (2010) 高齢者による学校支援ボランティア活動の保護者への波及効果 ―世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム“REPRINTS”から― 日本公衆衛生雑誌 57(6) : 458-466.
- 荻原 滋・Michael P.・Florian K.・有馬明恵 (2009) 日本のテレビCMにおける高齢者

- 像の変遷 —1997年と2007年の比較— メディア・コミュニケーション 59: 113-129
- 片桐新自 (2007) 「昭和ブーム」を解剖する 関西大学社会学部紀要 38(3): 43-60
- 森 宏樹・郷木義子 (2014) 高齢者疑似体験による教育学部学生の高齢者に対する意識の変化 就実論叢 43: 263-272
- 村田明子・田中康裕・山田哲弥・鈴木毅・北後明 (2010) 分譲マンションにおける交流活動の実態, 都市集合住宅のコミュニティと相互支援に関する調査研究 その3 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2, 305-306
- 村田明子・田中康裕・山田哲弥 (2012) 集合住宅の安全安心なコミュニティ構築の促進に向けた居住者相互交流支援システムの開発 清水建設研究報告 89: 135-142
- 中谷久恵・光岡攝子・長田京子・阿部芳江 (2002) 小・中学生を対象にした高齢者疑似体験による健康教育の評価 島根医科大学紀要 25: 11-15
- 沢田知子・曾根里子・染谷正弘 (2008) 大規模分譲集合住宅におけるコミュニティ形成過程に関する研究 その2: 経年時(入居後3年)における共用施設利用頻度の推移の要因考察 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2, 257-258
- 清水初子・水戸美津子・流石ゆり子 (2000) 老年看護学における教育方法としての体験学習 —「高齢者疑似体験」学習に関する文献分析から— 山梨県立看護大学紀要 2(1): 73-85
- 杉岡さとる・倉岡正高 (2009) 今、なぜ世代間交流なのか 社会教育 61(3): 30-33.
- Yasunaga M, Murayama Y, Takahashi T, Ohba H, Suzuki H, Nonaka K, Kuraoka M, Sakurai R, Nishi M, Sakuma N, Kobayashi E, Shinkai S, Fujiwara Y (2016) The multiple impacts of an intergenerational program in Japan: Evidence from the REPRINTS Project. *Geriatrics Gerontology International*, 16 (1): 98-109
- 大成有楽不動産 (2013) 「オーベルグランディオ横浜鶴見アリーナテラス」12月7日(土)より第1期販売開始 (2017年4月15日閲覧) <https://www.taisei-yuraku.co.jp/wp-content/uploads/b379c52724966eca2140bde9f8eb6e89.pdf>
- つながりネットコミュニケーションズ (2012) つながり ～マンションコミュニティの話をしよう～ Vol.5 コミュニティ×建築 (2017年4月15日閲覧) http://www.mlab.ne.jp/columns/community02_20120830/